

隋・唐時代の文化複合

— 中華帝国の形成 —

植 松 希久磨

The Cultural Complex in the Ages of Sui and Tang

The formation of Imperial China

UEMATSU Kikuma

中国文明について、世界システムの枠組みから、中国史の中心一周辺の接合構造を捉えなおせば、そこに大きく中国史の歴史的な異文化接触の経験が浮かび上がってくる。現代世界システムとの関連の中で引き起こされている、中国文明の諸問題を考察するためには、それがいかなるものであったかを見ておかなければならない。中国は内陸アジアに成立し、単に農耕社会であっただけでなく、秦・漢時代には西域を支配して絹馬交易を行い、また広く東アジアの海域においても、朝貢貿易を展開した。では、秦・漢から隋・唐にいたる漢民族を中心に築いた中華帝国の時代を見てみることにする。

1 夏・殷・周三代の王国

秦・漢帝国の歴史を生み出した中国大陸の風土は、「南船北馬」、「南稻北粟」「南釜北鬲」、「南糸北皮」、「南巢北穴」、「南道北儒」といわれるように、黄河流域を軸とした北方と長江流域を主体とした南方に二分され、象徴的な南北の文化的相違として表現される。華北の黄河流域は雨量の少ない、黄土台地からなり、麦を主とする畑作農民と遊牧民が混在し、また華中・華南の地域は、雨量の多い大地がひろがり、長江流域は古くから稲作農民と海洋民が交じり合って、生活していた。

中国の最初の古代国家は、長江流域と黄河流域の初期農耕文化として発生した青蓮崗文化・仰韶文化・大文口文化・竜山文化の複合した発展を基礎にして形成された夏・殷・周三代の王国である。その夏・殷・周三代の王国から春秋・戦国期を間に挟んで秦・漢帝国が完成した期間は、漢文化の形成と発展として「中国の原形文化形成期」をなしていた。夏・

殷・周三代の王国は北方のトルコ・モンゴル系文化やツングース系文化と西北のタイ系文化の重なった地域で、先史時代は瑤文化といわれる焼畑農耕の地域であった。またそこには、東南に広がる沿海地帯の越文化ともかさなっていた。秦の始皇帝が万里の長城を築いて、草原の遊牧民や山岳民族を北方に追いやるまでは、農耕民も遊牧民も、そして、また山岳民や沿海地方の海洋民も、融合して生活していた。この三代にわたる国家の交代は殷周革命ともいわれていて、長江と黄河という南北を流れる河川に形成された農耕社会が、早い時期に武力的衝突をともないながら相互に、政治、文化、経済などの面において融合していた。

この農耕複合社会は春秋・戦国時代の時期に引き起こされた、製鉄技術の進歩により、鉄製農具を使った灌漑農耕の発展と耕地の拡大によって、殷・周時代の国家的土地制度が崩れ、これまでの氏族制度は解体された。これまでの王侯貴族の生活を支えた青銅器製造から、農民の使用する農機具のための製鉄業や生活に必要な製塩業が発展し、都市の市場は行商人であふれ、物資が流通し、各地で貨幣の鑄造が始まり、使用されるようになった。秦帝国の成立する前、春秋戦国の動乱期に、黄河流域の諸国に挑戦したのが、海上国家を目指した呉・越と、長江に土着した荆楚だった。秦・漢帝国は、この長江全流域からベトナムにいたる地域を支配に組み込んだが、そのもとで越系氏族は盛に南海交易を展開した。

2 秦・漢帝国の成立

中国の最初の官僚制賦役国家になった秦帝国は、国家的土地制度（^{せんぼく}阡陌制）と中央集権的官僚制（郡県制）を確立し、黄河から長江にいたる全土を支配した。そして、夏・殷・周三代から春秋・戦国期を経て夏華一統（中華民族の統一）をなしとげた漢民族国家に統合された。北方は万里の長城を築いて遊牧民と対峙し、長江以南は黄河と長江の二つの農民生活を複合した農耕社会になっていったのである。

秦の後に成立した漢帝国は基本的には秦制を受け継いだ家父長制集団の発展に適合する特徴を備えていた。まず第一に、その国家的土地制度は、「限田制」とよばれるもので、国家所有に属する「公田」と一般農民の「私田」とに分けられていた。この国家的土地制度は貢納制社会内部の家父長奴隷制を現していたので、本来「限田法」では、官僚の土地所有と奴婢所有を制限し、商人の土地所有を禁止して、大土地所有に制限を加えるものだったが、実際には厳守されなかった。その結果、漢代の農民階層は、実質的な大土地所有者の豪族・中小地主・自営農民・小作人・奴婢・無産農民というように大きく分岐していった。

次に、この農民階層が「里」といわれる凡そ100戸を単位にした村落共同体に編成され、家父長制奴隷制を支配的な生産関係にしていき、漢帝国は基層共同体として地方行政システム（群—県—郷—里）の末端に組み込んでいった。特に、秦の「軍功爵制」に代わって、設けられた漢代の「二十等爵制」といわれる階層秩序によって、この国家一里共同体—小農民の社会・経済生活が内側から規制され、漢帝国の官僚制支配が末端の農民にまで

貫徹していった。それとともに「限田制」を内側から規制し、国家一小農民、豪族一耕奴・小作人、主戸一家僕の重層的な階級的利害を調整する、一種の生産関係の役割をも果たしていたのである。

第三の特徴としては、董仲舒に代表される漢儒の思想が国家イデオロギーになり、皇帝支配の形態である「郡国制」の文化コードになったことである。漢帝国の官僚制が秦の「郡県制」を引き継ぎながらも、異民族をも包含した「郡国制」として確立されたのも、この漢儒の思想が法家思想にとって変わったことを表している。董仲舒の提示した「忠一孝」の統合された秩序のもとで、豪族階級は郷村を支配する「三老」あるいは「父老」として国家権力に癒着し、それに隷属した小農民は「子弟」としてその家産制的支配を受け入れた。それこそが皇帝を頂点とする「二十等爵制」の秩序原理にほかならないが、「里」共同体に組み込まれた「編戸農民」は、くまなく皇帝の教化の対象になったばかりではなく、異民族である「化外の民」もその体制内部に組み込むことができた。

したがってこの皇帝の「冊命」（任命書）にもとづく階層秩序（冊封体制）によって、中国文明は周辺異民族をも包摂する「東アジア世界」を形成したことである。中央集権的官僚制の階層秩序、つまり「二十等爵制」にもとづいて、中国は周辺地域の諸国家・民族に対しても、この爵位を拡大して「王」・「侯」の位を与え、それを漢帝国の藩国として組み込んでいった。漢代において、それは周辺の朝鮮・日本・ベトナムおよびモンゴル高原とチベット高原の諸民族を含んで成立している。漢代の「郡国制」や「二十等爵制」は中国内部の国家一里共同体一小農民を貫く基本的生産関係として機能したばかりではなく、まさに異民族をもそこに包含する中国文明の統合機能をも果たしていた。

漢儒はその統合のシンボルであったが、そうした儒教の国教化にともなって、零細農民や無産農民の思想であった原始道家思想が、官僚制内部の「逸民思想」になり、また周辺異民族の「化外の民」の土俗信仰と結合して道教思想を形成し、中国文明のかなり広範な「基層文化」になっていった。そして原始道家思想は道教となり、ある時は、中国文明の文化複合の触媒となり、またある時には周辺革命の原理として作用していったのである。こうして漢帝国は、「世界帝国」を成立させていたばかりか、その小型家父長制家族を包摂した国家的土地制度と儒教一道教に裏内された中央集権的官僚制は、まさに中国タイプの貢納制社会の特色を表している。このように、経済・社会・宗教の三つシステムで特色を挙げると以上のようなになる。中国の社会学者、金観涛は『中国社会の超安定システム』において、この貢納制社会のタイプを（１）地主経済、（２）官僚政治、（３）儒家正統といった、三つのシステムの重層関係でとらえている。

こうして中華帝国は、漢末からの北方異民族の侵入と仏教の衝撃をへて、隋・唐帝国を形成し、中国最初の「胡漢文化複合」ともいわれる複合文化を形成する。ここでも唐末五代の過渡期において「新儒学」（程朱学）が形成され、その極点において家父長奴隸制から地主佃戸制への段階発展がなされたが、それは中国文明が秦・漢の旧いタイプから隋・唐の新し

いタイプをへて、さらに宋代の儒教・道教・仏教を融合させるにいたった時期である。それゆえに、中国のこの時期は「複合文化形成期」のサイクルとしてとらえられる。中国の秦・漢帝国が家父長制集団を基礎にした典型的な「官僚制賦役国家」が崩壊した以後、中国文明は、隋・唐帝国が成立するまでの約400年以上の長い間、北方異民族をも交えた大小さまざまな王朝の成立を繰り返し、タイプも変容していった。漢帝国が崩壊した魏・晋南北朝時代に中国文明は漢文化から唐文化に大きく転換した。儒教に代わって仏教と道教が興起し、新たな荘園経済を基軸に江南は中国の穀倉になり、漢代の管理交易を超えて南海交易が発展して、江南を中心にした環シナ海圏が形成された。長江文明は中国文明を海洋アジアへと向かわせる母体となり、中国文明の豊かさの源泉になった。

秦・漢帝国を基礎づけていた「里」共同体が変質し、国家的土地制度や中央集権の官僚制も解体していった。北方異民族の侵入とともに伝来した仏教によって、秦・漢帝国を特色づけていた儒教文化も大きく変容し、中国史上に生起してきた漢文化から唐文化への転換と、その後の儒教ルネッサンスともいべき文化変容はたしかに中国文明のタイプの新しい発展を示している。では秦・漢帝国とは異なったタイプとして成立した「世界帝国」=隋・唐帝国の文化変容を見てみよう。

3 隋・唐帝国の文化変容

秦・漢帝国崩壊以後、隋・唐によって全土が統合されるまでの約400年の間に、中国の貢納制社会は大きく変わっていった。秦・漢帝国の基礎をなしていた「里」共同体が、戦乱の過程で力をつけてきた地方豪族によって支配されるようになった。戦乱の果てに流出した多数の流民からなる奴婢や耕奴を使って、これらの地方豪族は大規模な荘園を営むようになった。当時の荘園経営を生産関係からみれば、奴隷制ウクライドと封建制ないし農奴制ウクライドの複合形態をとっていた。これに対して、北魏を中心として、国家も無主の田地を国有化し直接経営にのりだし、封建化の傾向を帯びて発展してきた地主に対処した。そして国家体制の中に収斂させる占田・課田制を成立させ、均田制へと結実させていった。

この結果、秦・漢以来の土地制度は大きく変わっていった。こうして豪族や大土地所有者を基盤にして、秦・漢時代の中央集権の官僚制も形態が大きく変わってきた。秦・漢帝国時代においても大土地所有者としての豪族は存在していたが、それでも阡佰制や限田制の枠組みの中で強い国家的規制を受けていた。だが、漢末以降、その枠組みを破って大土地所有者が大量に出現してきた。そして隋・唐帝国の国家的土地制度や中央集権の官僚制は、地主および自営農民の個人所有を明確に保持したものとなり、三国時代以来400年の過渡期の中に発芽した領主化の傾向や封建的要素を巧みに取り込んだ一種の「貴族官僚制」を形成していった。こうして漢末以降の豪族層の急速な発展は、この国家的規制が異民族との抗争をきっかけにして弛緩して、地方豪族はその過程で生産力を自力で発展させてきた。しかし、

広範な自営農民層はそうした豪族に隷属され支配されながらも、領主制の範囲を越えて広く存在し続けた結果、豪族・貴族を中核にした新しい「貴族官僚制」が形成され荘園主はもちろんのこと一般農民の個人所有をも含めた均田制が成立してきたのである。

そして価値体系もさらに大きく変容した。漢末の黄巾の乱が道教信徒によって担われたように、秦・漢時代の儒教は次第に衰退していった。「里」共同体の崩壊をきっかけに道教が第二の儒教として全面に登場してきた。地方の共同体の安全と福祉を講じるものとして、困窮した民衆はこれを紐帯として結社を組織して反乱を起こした。道教は本来仏教のモチーフだった一種の個人救済と結合し、魏晉・南北朝期に大きく発展した。大規模な戦乱のために郷里を失い流亡し、異民族との雑居にあった農民たちにとっては、伝統的儒教ではもはやその効用を失い、個人的な救済宗教に身をゆだねるよりほかなかった。当然、仏教も民衆レベルの共同体に深く浸透していった。こうして道教や仏教は、魏晉・南北朝期には、下位の共同体の新しい生活秩序として地方豪族に受け入れられるとともに、やがてこの時期の国家宗教として貴族社会の上位文化を形成するにいたった。

体制を打倒した後、社会体制を新しく形成するための機軸となった道教は、やがて庶民レベルでの自律的な信仰共同体として、世俗国家の組織者である貴族・士大夫・知識人の中にも信者を獲得し、世俗国家の補完物となった。また仏教も専制的支配者の支持と保護を獲得した。こうして道教と仏教は国教化した。そして隋・唐時代には夥しく寺院が建立され、ことに仏教は教理を発達させ唐代には天台や華嚴などの中国大乘仏教を成立させている。こうして隋・唐帝国に代表されるような均田制と律令制と仏教を三本柱にした「世界帝国」が成立した。その結果、唐代300年間、全体的にみれば「ローマの平和」に比肩できるような平和の時代が続き、生産技術が進歩して産業は大いに発達した。

唐の時代といえば、多くの人々が、砂漠を横断するシルクロードを思い起こす。駱駝の背に跨ったペルシャ系トルコ人やムスリム商人が往来していた。唐の都の長安や洛陽には金色に輝くパゴダが並び、周辺から都入りした各国の遣唐使の行列や学僧に交じって西域の胡服を着た商人が群れをなしていた。唐帝国は宗教・美術工芸・科学技術から日用品にいたるまで、このインド・イラニカ風の文化を取り入れて、東アジア世界を拡大したが、唐の繁栄を支えたのは、陸のキャラバンの道よりも、長江文明を基盤にした江南の豊かさであり、その動脈になった帆船の道だった。

翻ってみれば、長江流域と黄河流域の初期農耕文化として発生した河岸複合文化を基礎にして、殷・周の帝国規模の国家が形成され、春秋戦国の過渡期を間に挟んだ秦・漢帝国までの期間は、漢文化の形成と発展として「中国の原形文化形成期」をなしている。そうした文化の発展サイクルを機軸にしてみれば、これらの文化変容は、北方の異民族との対抗によって引き起こされたものであり、初期農耕時代につぐ最初の本格的な「中国の複合文化形成期」として把握できる。

漢帝国が三世紀のはじめに没落したことは、中国大陸における漢民族の覇権の後退であっ

たが、これは北方民族の大移動のきっかけをなし、東アジア全域にまでおよぶ広範な胡族風・漢族風文化の形成という大潮流が巻き起こされていった。この胡族風・漢族風文化というのは漢民族と異民族が織り成した複合文化であり、そこには北方系ないしチベット系遊牧民族ばかりでなく、広くは南方系の諸民族や東方の朝鮮・日本などの諸民族が含まれている。いわば東アジア地域の複合文化を指しているのであり、これらの地域における諸民族の土着文化に巨大な影響を及ぼしていったのである。いわば東アジアの文化変容のもとになったのである。こうした胡漢文化複合を基礎にして成立したのが隋・唐帝国であった。

参考文献

- 西島定生 『中国古代帝国の形成と構造』 東京大学出版会 1975年
中国史研究会編 『中国史像の再構成—国家と農民』 1983年
福永光司 『馬の文化と船の文化』 人文書院 1996年
徐 朝龍 『長江文明の発見』 角川書店 1998年
大林太良 生田滋 『東アジア民族の興亡』 日本経済新聞社 1997年
小林多加士 『海のアジア史』 藤原書店 1997年
小林多加士 『文明の歴史学』 同文館 1991年
溝口雄三・富永健一・中嶋嶺雄・浜下武士編 『漢字文化圏の歴史と未来』 大修館書店 1992年
金観壽・劉青峰 『興盛與危機』 中文大学出版社 1992年
黄仁宇 『中国マクロヒストリー』 東方書店。1994年
藤善真澄 『隋唐時代の仏教と社会』 白帝社 2004年

(うえまつ きくま 本学非常勤講師)